

ロシア語における数のカテゴリーについて¹

はじめに

この小論は昭和42年度前期に神戸市外国語大学で行った語学特殊講義に若干手を加えたものである。皆様の御笑覧を乞い、あわせて御批判をいただきたいと思う。

緒 論

§1 印欧語は一般に文法的範疇としての数の区別を有しているが、現代ロシア語においてこれは単数と複数の区別となつてあらわれている。いうまでもなく単数は支持する事象が1個である場合に、複数とは2個以上である場合に、それぞれ使用されるのが原則と考えられているが、このことから数のカテゴリーは文法的性のカテゴリーと異つて現実に存在する事象と直接に関連しており、極めて論理的かつ明白なものという印象を受ける。

しかしこれは単なる印象にしか過ぎない。少しく立入つて考察すれば、このカテゴリーの使用は必ずしも客観的現実を直接に反映したものではなく、極めて錯綜した様相を呈していることが知られるからである。

これは意外なことではない。客観的現実がそれを認識する主体を通じて、主観と客観の媒体である言語に反映するものであるとするならば、言語に反映する「現実」なるものは、客観的現実そのものではあり得ないと考えられるからである。従つて言語に現実が反映したとすれば、これは主観化された現実、いわば主観的現実でなければならない。これは当然主体の認識の仕方に依つて規制せられている。しかも多くの徴候からすれば、言語に反映するものは極めて感性的な認識の結果であるように感じられる。

してみれば言語における論理は、論理学のそれとはおのずから異つていてと考えねばなるまい。「言語は独自の論理を有している」(泉井博士)というのは、まさにこの謂に外ならないといえよう。

§2 数のカテゴリーについてみれば、単数と複数の区別そのものが、既にしてこのことをあらわしている。「単数」と「複数」はその形を異にし、明確に質的な相違としてとらえられているにもかかわらず、「複数」の内部においてはそれが2であれ3であれ、「単数」ではないことを理由に同質のものとして扱われているのである。これは単なる虚構にすぎない。現実には1と2の懸隔が2と4、あるいは3と5の懸隔よりもよりも大である、何等の理由も見出せないであらう。事実言語によっては単数と複数のあいだに「双数」

¹ 『古代ロシア研究』 第9号 昭和43(1968)年 123-143頁。

dualis あるいは「三数」trialis、更には「四数」quadralis までも有するものもあると言われる。

かくして「厳密なる」客観的現実、その最初の段階で破綻せざるを得ないであろう。

これに対して我々の認識の仕方を考慮しながらこの問題を考察すれば、いくらか異った結果が得られるように思われる。以下この点について一般的に考えてみよう。

§3 先ず стол「机」複数 столы を考えてみる。我々が столы というとき、我々はこれを「机の表象」の「2 個以上の集合」としては把握していないと思われる。即ち「2 個以上の机の集合の表象」として理解するのである。これは一見些細なことのようにも思われるが、やはりこの相違は重要である。このことは作業仮説としてこの小論の基本的な論拠をなすからである。即ちこれは стол と столы が互に異なる表象に対応していることを示すものなのである。極端に言えば、стол と столы の相違は、これらが互に相異なる表象に対応しているという点に関して、例えば стол と лампа における相違と何等選ぶところはない。В. В. Виноградов 一派の文法家が、数のカテゴリーを目して語彙のカテゴリーと主張しているのも、この限りでは一面の真理を含んでいるといえよう²。

§4 さてここに今 1 個の事物が存在すると仮定する。この事物の表象は現代ロシア語においては単数形によってあらわされるであろう。これに新たに 1 個を加えて得られる表象は、複数形によって表現せられるにちがいない。また 1 個を加えてみる。複数である。更に 1 個を加える。依然として複数に留る。かくして複数はやがて有限より無限へと連なるかにみえる。

しかしながら我々の感性的な認識は、必ずしもこのような論理に対応してはいない。個物はそれが一定数集合するや、一の集合体としてのみ把握しうるものとなるからである。これはもはや曾つての個物とは同じものではない。これは自らの名を持たねばならぬ。かくして複数はいずれも単数に回帰する。無限も帰するところ一の単数に外ならないのである。

§5 ところで一定数の個物が一の集合として現象し、かかるものとして把握せられる場合には、その集合の成員たる個物が相互に一定の均質性を帯びていると認められなければならないまい。これは個物の個別性の弱화를前提とする。逆に言えば個別性の低いものほど、均質なものと認められることが早い。かくして単数が複数を経て単数に回帰するする道程は、事物によって必ずしも一様ではないと考えられて来る。

ところでこのような個別性の弱化は、実は言語的カテゴリーとしての「数」の本質的な一面を成しているといえよう。「数」として包括し得るためには、これらが同質のものと認められることを要し、既に自己の裡に個別性の弱化の契機を含んでいるからであり、ま

² *Русский язык*, М. 1947, p. 154.

た一方では名詞の複数形に対応する表象は個々の事物の表象の総和でなく、事物の総和の表象であるという上述の仮定によって、複数形に対応する表象が必ずしも個物の表象の整数倍であることを要しないからである。

§6 他方集合の表象は個々の成員の個別性の弱化にもかかわらず、個物の表象とは、その量感において異っている。例えば вода「水」に対する複数 воды「多量の水」にみられる通りである。かくして「複数」は必然的に個々の事象の個別性の弱化と、全体の枠の拡大という、相矛盾する2つの面を統一したものとして把握せねばならない。これが一つの極限に達したとき、成員の個別性は消失し、均質なる集合に達するであろう。単数への回帰である。

この故に量感の差は均質化の感覚と共に個物の集合を語彙的に区別する際の重要な支えとなっていると考えられる。却ってこのような量の感覚こそ、我々の認識の仕方に直接対応したものであり、数はこの感覚を論理化した結果に過ぎぬともいえよう（泉井博士）。

我々が億といい、あるいは兆という場合、我々はもはやこれらを数としては認識していない。そこにあるのはただ量の感覚のみである。泉井博士のいわれる所によれば、両者は心に受ける「圧力」、「心圧」において異っているに過ぎないのである。これを論理的な見地から「数」であると考えするためには、数直線の上に位置づけることを要しようが、どこに位置づけるかは単なる約束事にすぎぬ場合もある。例えば billion は英国では1兆を意味し、米国では10億を意味しているが、このことは billion の量感が極めて大であるがために、これが数直線のどこに位置するか感覚的に把握しがたいという事情にその原因を負っているのではないかと想像される。ロシア語の場合 тьма は古くには1万をも意味し、また「無数」をも意味していたが、これも同様の原因によるものと察せられる。特に тьма を1万とすると тьма тем は1万の1万倍即ち1億を意味すべきであるにもかかわらず、現実には10万を指しているのも、上述したことを考え合わせれば興味深い。

§7 我々がどの程度までを数として把握できるかは、必ずしも明らかではないが、原始的な心性にあってはその幅はかなり狭いものであったに違いない。スラヴ語の場合4までは形容詞的な修飾語であったが、5以上は女性集合名詞であったことも、このような事情を示唆するものといえよう。これは現代ロシア語においても5以上の数詞は複数生格形を要求するという形で残されている。

逆にこのことは極めて原始的な心性にあっては、少なくとも2～4ぐらいは「数」として把握し得たことを示すものと考えられる。もしそうとするならば、2個、3個あるいは4個の個物の集合をそれ以上の、いわゆる「複数」と同一の形式をもって表現することは、それが「量」でなく、「数」として把握され得るという、まさにそのこと故に、感覚的な無理を生ずることにもなるであろう。ここから「単数」でも「複数」でもなく、その両者をつなぎ得る形式が必要となる。印欧語の古い時代に双数が存在し、あるいは言語によって

は三数あるいは四数をも区別するというのは、まさにこのような感性的な認識の然らしむるところであったと、考えられはしないであろうか。

§8 このような感性的な認識にもとづくカテゴリーは、そこに理性的な反省が加えられ、無定形な量の塊から漸次より大きな単位の「数」が析出されて来るにつれて、即ち感覚的に「数」として把握し得る範囲が拡大するにつれて、その意義を漸次喪失するであろう。何故なら複数の内部で 3, 4, 5, …… の「数」が析出することにより「複数」というカテゴリーの内容が、これらの「数の系列の全体」を意味するようになり、この意味で 2 と連続するに至るからである。推測の域を出ないが、双数の消滅も実はこのような「論理化」の結果必然的に生ずる複数の内容の変化に、その原因を求めるべきではあるまいか。

さて「数」を以上のようなものと仮定すれば、これはまた必然的に「活動体」「不活動体」のカテゴリー、ならびに文法的性のカテゴリーと関係をもたざるを得なくなる。両者共個物の有する個別性に基づくものであると考えられるからである。これらのカテゴリーと「数」のカテゴリーとの密接な連関は、かくして論理的にもその基礎を獲得するのである。

本 論

用語について

§9 序論において述べて来たところから単数には個物を表示するものと、集合をあらわすものがあることになる。前者を仮に *singularia individualia*、後者を *singularia collectiva* と称し、それぞれ *s*, *s'* を以てこれを表示することにする。複数 *pluralia* は *p* によって示す。

s - p - s' の系列について

§10 純論理的には человек - люди - народ のような系列もこの類に属せしめることができようが、これはロシア語の言語意識においては、一つの系列をなすものと考えられていない。一つの系列をなすと認められるためには、そこに何等かの有契性 *motivation* の存在が必要だからである。

このような有契性を保っているのは、現代語では大部分 -ство による構成を有する名詞である。例えば студент - студенты - студенчество, офицер - офицеры - офицерство, учитель - учителя/и - учительство などがこれである。

今日既に生産性を喪失したものとしては、例えば лист - листы - листва, плот - плоты - плотва のように -ва を接尾辞とするものの外、адвокат - адвокатура, агент - агентура, кабалер - кабалерия, пионер - пионерия のように外来語の語構成によるもの、などがある。

§11 この類に属せしめるべきものとして印欧語の接尾辞 *iā/*iə による構成がかつて存在していた。スラヴ語でこの構成に本来属していたことが確実なのは **братья** (гр. φρατρία < *bhratr-iə) のみであるが、古代ロシア語においてはその他にもこのように -ья による集合名詞の存在がみとめられる。例えば、**князь** — **князья**, **мужь** — **мужья**, **зять** 「むこ」 — **зятья**, **шур-ин** 「妻の兄弟」 — **шурья**, **дядь** — **дядья**, **друг** — **другья**, **попъ** 「僧」 — **попья** etc.

これらの派生名詞が元の名詞と語彙的に異なるものであり、今日の **брат** — **братья** にみられるように文法的な形式でなかったことは、これらが女性単数形であることから明らかである。

例えば、

- (1) Совокупишася вся **бра(ть) я**, С(вя)тополкъ, Володимеръ и Д(а)-в(ы)дъ и Олегъ. (ПВЛ., л.6609)
- (2) По см(ь)рти **братѣ сея** быша обидимы Древлями. (ПВЛ., 16)
- (3) Имѣти ти мене князя великого братом старѣишимъ ... а **братью мою молодшюю братею молодшею**. (Дог. гр. Вас. Дм. 1389)
- (4) Добра хочу **брат(ь)и** и Русьскѣи земли (ПВЛ., л.6694)
- (5) Княземъ же слышавшимъ такую погыбель о **братѣ своем** и до бояръ, воспиша вси. (ПВЛ., л.6609)
- (6) Не лѣпо ли ны бѣшет(ь) **брате** (Сл. п. Из.)

братья 以外の例としては、

- (7) послани от Игоря, великого князя русскаго, и от **всякоя княжья** (ПВЛ., л.6453)
- (8) А кого ми дасть б(ог)ъ **зятью** (Дух. гр. Ив. Ив. 1358)
- (9) И детям их и з **дядею** дел по отце ... (Судебник 1587)
- (10) А въ приказъ приказываю господину посаднику Федору Тимофеевичу ... и **шурьи** своем Ивану и Василью (Дух. Ост. 1396)

§12 以上の例からも明らかなように、これらの名詞は動詞の呼応の場合には常に複数形を使用しており、このことからこれらの名詞は文献時代には既に「複数的」に使用されていたと考えられる。これらはやがてそれぞれ **братъ**, **князь** などの複数形と考えられる

ようになるが、そのためには 1) 規定語が複数的一致を行うこと、2) 本来の複数形の廃用、3) 単数変化の廃用とこれに伴う複数語尾の使用、の 3 つのモーメントが考えられる。

1) に関しては既に原初年代記において複数形による一致がみとめられる。例えば

(11) быша три братья ... по **сихъ** братьи держати почаша родъ ихъ княженъ въ Поляхъ. (ПВЛ., 9-10)

2) の場合 князи, дяди などは一般にみとめられるが, братьи の形は古代ロシア語期においても殆んど見受けられない。

3) に関しては例えば 17 世紀の Уложение においては

(12) дочерямъ вотчинъ 3 **братъею** не давать, пока **братъя** ихъ живы, а как **братъи** ихъ не станеть ... (Уложение 1649 г.)

のように братья は未だ本来の変化を保存しているが, дядья の場合は дядьев или теток のように既に複数形の変化語尾が用いられているのがみとめられる³。

§13 古代ロシア語には上述の -ья による構成のほか、-ье による集合名詞が存在した。この形の成立に関しては未だ十分に明らかではないが、本来は I 語幹名詞の複数主格 *i-es > je (cf. gosti-es > gostje) に来源を有する可能性もある。何れにもせよ -ье の構成による集合名詞は不活動体男性名詞あるいは中性の名詞から派生し、この点で人をあらわす男性名詞から派生する -ья の語尾と著るしい対照を示していた。例えば、

(13) кнутъ — кнутіе:

Тогда же Кудара Пришельского **кнутъемъ** были (Соф. ер. л.6950)

(14) камы — каменеіе:

и бяхуть съ высокихъ скалъ на градѣ Гръкы и Варягы **камениемъ**, и стрѣлами, и соулицами (Новг. 1. л., л.6712)

(15) перо — перье:

Зубы и носъ **человѣчь** ; а гдѣ уши, тутъ **перье** (Пут. Генн. и Позн.)

(16) коря — коренье:

Корение бо грѣховное посѣшти повелѣваетъ ев(а)нг(е)льское оучение. (Панд. Ант. XI в.)

³ П. Я. Черных, Историческая грамматика русского языка, М. 1954, р. 188.

§14 極めて興味のあるのは **-ье** の構成によるものが、中性名詞の外に不活動体男性名詞の場合に用いられた事のほか、この構成によるものは動詞の呼応も単数によって行われるという事実である。

例えば、

(17) Коли **камение воспловеть** по водѣ ... тогда безумныи уму научится
(Слово Дан. зат.)

(18) Да родится въ немъ **камение** дорогое (Афан. Никит.)

(19) Егда же ... **лиственные прозябнуть**, вѣсте яко близъ есть жятва (МФ.
XXV. Ост. ев.)

これは集合名詞の成員の個別性の大小に依存するものであろう。個別性の比較的高い成員の集団である **-ья** の語群に対して、**-ье** の語群はより個別性の低い、コンパクトな集合を形成していたと考えられる。前者が女性名詞、後者が中性名詞であるのは、文法的カテゴリーの考察と比較すれば興味深い⁴。

これらはやがて **-ья** の形をとるようになり、指人名詞から派生する本来の **-ья** による集合名詞と混同されるに至った。U 語幹名詞の *sūnus > synъ の複数形 *sūnoues > synove が сыновья の形をとるに至ったのも、この **-ье** > **-ья** の影響に依るものと考えられる⁵。

§15 **-ство** の構成による集合名詞の形成は、現代ロシア語においては唯一の生産的な方法である。これは抽象名詞の構成と同じであり、**-ство** が集合名詞をつくるのが一般化したのは、18 世紀以降のことである。

しかし古代ロシア語期にもこの構成による集合名詞が全くみられなかった訳ではない。例えば、

(20) И рѣста ц(еса)ря и **боярьство** все. (ПВЛ., л.6415)

(21) Б(ог)ъ есть оустаяяи вьсе **ч(ь)л(овѣ)ч(ь)ство** (omne humanum genus.
παῖσαν τὴν ἀνθρωπότητα) (Пат. Син. XI в. 83)

この接尾辞による構成は、例えば боярьскыи, войскыи челоуѣчскыи のように接尾辞 ***-sk-** による形容詞とほとんどの場合並行している。従ってこれは本来は意義的にも抽象名詞であった可能性が濃い。братья のタイプの集合名詞が複数に転化するのが 14 世紀以降、листья, листьѣ のタイプのものが複数になるのが 17 世紀中期以降であるこ

⁴ 文法的性カテゴリーについては前年度に講義した。内容は未発表。

⁵ П. Я. Черных, *op. cit.*, p. 189.

とを考えれば、-ство の構成による集合名詞が 18 世紀以降に急激に一般化するの、-ья の形がこの時期までに最終的に複数化し、もはや集合名詞を形成すべき手段がなくなったことによるのではないかと想像される。

このような変化の結果、古くには男性活動体名詞に対して男性不活動体名詞および中性名詞はその構成を異にしていたものが、その区別を失い、男性及びこれまで $s-p-s'$ の系列の s には用いられなかった女性活動体名詞が、共に -ство による集合名詞を有することとなった。例えば учителя и(или) учительницы = учительство。

これはロシア語における活動体不活動体の範疇の発達と平行するものとして興味のある現象である⁶。

附言すれば既に述べたように -е > -ья および -ья の構成にかかる集合名詞は複数形に転化した、未だ集合名詞のニュアンスを完全に喪失してしまっただけではない。特に本来の複数形と並存している場合には、両者の対立は顕著であり、意義の分化に参与している。例えば зубы 「歯」 — зубья 「歯車等の歯」、колы 「点数」 — колья 「くい」、корни 「根」 — корниа 「乾燥した根」、листы 「紙葉」 — листья 「樹葉」などにみられる通りである。

Singularia collectiva

§16 集合名詞は量によって計られる無定形なものであること、複数を有しない、いわゆる singularia tantum であることにみられるように、物質名詞に近い性質を有している。両者の相違は、私見によれば、対象の認識の仕方にある場合が多い。例えば песок 「砂」である。これは理論的には無数の個体の集合であるに違いない。しかし我々の感性はその個体に対して名前を与えようとはしない。我々が直接に認識するのは、まさにその集合体に外ならぬからである。個体をあらわそうとすれば、却って「砂粒」зерно песка, a grain of sand のように「砂」から出発しなければならない。即ちこの場合には $s-p-s'$ の系列を欠き、 s' が認識および命名の基点となるのである。このようなことが可能なのは、偏に個体の個別性が極めて低いからに外なるまい。

§17 物質名詞（あるいは一部の集合名詞）の形態的指標をなすのは、いわゆる部分生格 genitivus partitivus -y/ю であるから、これを手掛りとして同様の例を求めれば、

бисер, -y 「ビーズ」、виноград, -y 「ブドウ」、горох, -y 「エンドウ豆」、жемчуг, -y 「真珠」、рис, -y 「米」、сахар, -y 「砂糖」、перец, -pцy 「コショウ」、хворост, -y 「枯枝」、щебень, -бню 「砂利」、ячмень, -ю 「大麦」などがこれに属する。これらもすべて singularia tantum である。

人は картофель, -ю 「ジャガイモ」、лук, -y 「タマネギ」などがこれに属することを

⁶拙稿「ノヴゴロド原初年代記シノダリ本における活動体と不活動体の区別について」『古代ロシア研究』第2号(1962)参照。

知って奇異の念に打たれるかも知れない。ここからこれらが *singularia tantum* であるのは、その形状によるのではなく、「物質」として扱われているからに外ならぬ、という主張も生じる可能性があると思われる。これらの成員が砂粒に比して余りにも大きいからである。

しかし我々はまた *народ*, -у「群衆」がこの類に属していることを知っている。*народ* の成員たる *человек* は果して *картофель*, *лук* よりも大きくはないであろうか。かくして問題は形状の大小によるものではなく、一にかかって我々の認識の仕方如何にあると思われて来るのである。

§18 *картофель* が単なる「物質名詞」ではなく、集合名詞の性格を有していることは、例えば *картофелина* の存在によっても知られる。

上述の名詞の多くは、その成員たる個物を指示する場合、-ин-а の接尾辞によって派生した名詞を用いる。*бисер* — *бисер-ин-а*, *виноград* — *виноград-ин-а*, *горох* — *горош-ин-а*, *жемчуг* — *жемчуж-ин-а*, *изюм*「乾ブドウ」 — *изюм-ин-а*, *тёс*「屋根板」 — *тес-ин-а*, *хворост* — *хворост-ин-а*, *хрен*「わさび」 — *хрен-ин-а* 等。これに対して *песок*, *перец* の場合は *песч-ин-ка*, *перч-ин-ка* のように更に -ка を加えることによってその微細さをあらわしている⁷。

картофелина の存在によって *картофель* も集合名詞であることは、かくして疑いがない⁸。何故なら接尾辞 -ин-а における -ин- は、たとえば *крестьян-ин* における -ин と同じ来源を有するものであって、集合名詞から個体をあらわす名詞を派生する *singulatif* (*suffixus singulativus*) であると考えられるからである。*лед*「氷」 — *льд-ин-а*「氷塊」、*снег*「雪」 — *снеж-ин-а*「大きな雪片」も本来はこれに属するものであろう。

また *песчинка* のように、接尾辞 -ка によって延長された形が認められることは、ロシア語においては、*картофель* と *песок* との間の成員の個別性の度合いを言語的に表現しようとする傾向が存在することを示している。

性、活動体不活動体の別、などからも明らかなように、ロシア語はこのような「個別性」の強弱に極めて敏感な言語であると言えよう⁹。

§19 この構成と平行するのは、*крестьян-ин* — *крестьян-е* の型の名詞である。これについて言えばギリシア語の *αράνιος* から派生した父称 *Ούρανίων* に対して方言的に *Αύσανδρος* から *Αυσην* のように -ἐν による父称の構成法が知られているところから *ἐν

⁷ *порох*「火薬」は *порош-ин-а* と *порош-ин-ка* の両様の構成を有する。

⁸ *лук* に期待される **луч-ин-а* が存在しないのは *луч* — *лучина*「たいまつ」の存在の影響であろう。В. В. Даль によればプスコフ方言に *луч-ин-а* が「一個のタマネギ」の意味で存在するようである (*Толковый словарь*)。また *сахар* も砂糖の小塊の意味で *сахаринка* の形がダーリにはある。

⁹ ロシア語が指小辞を多用するのもこれと関係があるかも知れない。

を想定し、これがスラヴ語の物主形容詞 *yo の j に附加された *jēn にさかのぼるとする Vaillant のような学者もある。何れにもせよこの -ян- によって構成される名詞は人の集団に対して与えられたものであるから、個体をあらわすには -ин- の接尾辞を必要とした。現代ロシア語の крестьянин などの名詞が、複数において -ин- を欠如するのは、まさにこの故である。ここにおいてはこの集合に属する個々人は、二次的にのみ識別されるからである。

この意味で крестьян-е — крестьян-ин などは、さきに挙げた картофел-ь — картофел-ин-а と全く平行したものといえるが、картофель が単数であるのに крестьяне は複数として扱われている。これは братья と同じく、крестьяне などが人をあらわすものであり、картофель などに対してその成員の個別性が高いことに起因するのであろうと推察される。即ち個々の成員の特徴が完全には捨象され得ないために、単数名詞として扱い得るほどには内容が均質なものではなかったと思われるのである。いま個別性の順位を示せば、次のようになろう。

крестьяне(複) > картофель(集・単) > песок (集・単)→

крестьян-ин > картофел-ин-а > песч-ин-ка

§20 singulatif の -ин- は、古代ロシア語においては картофелина のように集合名詞から単数名詞を派生することが比較的容易であって、今日のロシア語におけるような文法的使用に局限されてはいなかった。例えば、

(22) сице придоша Русь пытающе вѣры нашея. (ПВЛ., л.6495)

(23) и волнамъ вельямъ въставшемъ засобъ безбожныхъ Руси корабль смяте (ibid., л.6374)

のように集合名詞として用いられる Русь に対して

(24) или от Руси или от Грекъ, проданъ в ону страну аще обрящетьс(я), ли Русинъ, ли Греченинъ... (ПВЛ., л.911)

のように -ин- によって個々の人物を表わす場合がみられる。特に грыци のように通常複数形を用いる語においてすら、греченинъ の形がみられることは、興味深い。ここから -инъ の機能が単に「個体」を示すという論理的なものに留らず、個別性を強調するものであるとみてもよいのではないかと考えられて来る。事実接尾辞 -ин- による構成は何らかの文体的効果を伴う箇所によく見出されるのである。例えば、

(25) Въ си же времяна быша и Обри (иже) ходиша на Аръклия ц(еса)ря. и мало его не яша. Си же добръ воеваху на Словѣньх и примучиша

Дулѣбы сущая Словѣны и насилѣ творяху женамъ Дулѣпскимъ.
аще поѣхати будяше **Обърину**, не дадыше въпрячи коня ни вола, но
веляше въпрячи 3 ли 4 ли 5 ли женъ в телѣгу и повести **Обрина**.
(ПВЛ., 11)

ここで Обры と Обринъ の相違をみれば、Обринъ の場合話者の注意がそこに集中しており、そこから話者のこの事件に対する態度といったものが感じられるのである。-ин の機能を、話者の注意をある一点に集中せしめるものとしても差支えないかも知れない。

文法的性 genus について中性・女性・男性の順に個別性の程度が大になるという仮説¹⁰をここに適用すれば -ин と -ин-а (女性) との対立は個別性の強弱に対応していると考えられる。例えば дѣти — дѣт-ин-а の場合もこのことを裏付けるものと思われられる。

крестьян-е の類が複数に留ったのも、この個別性が比較的高かった故であると考えられるが、他方これと集合名詞との懸隔は極めて僅少なものであつて、ロシア語のようにこの差異に敏感な言語のみが区別できるものであつたと思われる。事実 господин — господа における господа は、例えば Оже закоупъ бѣжить от Г(оспо)ды (Русс. пр.) にみられるように女性単数の変化を行い、古くには集合名詞であつたことを示しているのである。

§21 мед, воздух のように -ин-а の構成による派生語を有し得ない狭義の物質名詞は、成員の個別性がもはや認められない、均質な対象を示すものであるが、他方では воздуху, меду のようにいわゆる genitivus partitivus を保持しており、жемчуг, жемчугу などの類に隣接するものと考えられる。

ところで対象の一定の集合を一つの名称をもって呼び得るためには、その成員が何等かの点で共通なるものを所有すると認められることを要する。ここに一つの範疇が立たねばならぬ。この範疇がそれを構成する実体から独立したと認められたとき、それは抽象名詞に転化するであろう。

これには永い期間が必要であつたと考えられる。例えば印欧語の動詞語根 *leuk- からは *leuk-s: lat. lux, sl. лучь 「光」; lat. luceo 「輝いている」; *leuk-s-men: lat. lumen 「光」; *leuk-s-nā: lat. luna, sl. луна 「月」; *leuk-s-tro-m: lat. lustrum 「光」などが派生し、原義は「輝く」の意と思われる。ギリシア語の λευχός 「白い」もこの語根に属しており、古くには「輝くもの」の義であつたに違いない。「輝くもの」に属する具体的な事物が漸次増加し、それに伴って意義の枠が拡大し、やがて「白い」という極めて抽象的な概念に到達したとみられるのである。ロシア語の белый 「白い」もサンスクリットの bhālam 「輝き」、bhāti 「輝く」、ギリシア語の πεφύσεται 「現れるもの」、φάλιος 「明る

¹⁰拙稿「数詞 два, три, четыре を含む構文の成立について」『人文』第13集(1967)、77頁、註2参照。

い」などと同じ起源を有し、やはり本来は「輝くもの」であつたと考えられている¹¹。

このような事実からも明らかなように、集合名詞は一方では抽象名詞とも密接な関連を有している。集合名詞の接尾辞が抽象名詞と多くの場合共通しているのも、故のないことではない。

Singularia individualia について

§22 個物の個別性が極めて低いか、あるいは低いものと考えられた時は、既に述べたように個物にではなく、個物の集合に対して名が与えられた。

これに対し同一の個物を指示する場合にも個別性の高いものとして指示する場合、低いものとして指示する場合など、さまざまな段階が考えられる。これは語の意義の抽象度に比例しているとみられる。例えば同一の人物を指す場合に、Иван, мужчина, человек 等々の語をもってすることができるが、Иван という固有名詞を用いるとき、この語は当該人物以外のいかなる人物をも、原則として指示することはない。これに対して мужчина という語は他の男性の人物を指す可能性をも有している。мужчина が特定の人物を指示し得るのは、ひとえにこの語の使用される文脈あるいは状況によるのである。英語などはこれを冠詞によって区別しているが、ロシア語ではこれを区別すべき言語的な手段を有していない。человек の場合は男性のみならず女性の人物をも指示することが可能であり、мужчина よりも更に抽象度が高い（現実性の度合いが低い）。

逆に普通名詞であっても例えば матушка, дедушка などは通常それが使用される場面においては対象の限定が強く、従って固有名詞にも比すべき現実度を有している。これらの名詞が人名と並んで матушкин, дедушкин のような物主形容詞を派生し得るのも、まさにこの故と考えられる。

§23 このように個別性の大小は大まかに言って語の現実からの距離、即ち語の意義の抽象度に照応している。語の意義の抽象化はそこに包含さるべき対象の範囲の拡大を意味し、そこに含まれる対象の個別性は必然的に捨象されねばならぬからである。

いま我々が человек といったとき、状況によって、あるいは冠詞のような言語手段によって、それが特定の人物を指示することが明白であるならば、これは単なる文体の問題にしかすぎぬであろう。しかしもし特定の対象を指示しない場合はどうであろうか。человек によって指示され得るすべての対象は、すべて指示され得る「同一の」蓋然性を有するはずである。従って形式的には単数であるとしても、意味するところのものは、これに属すべきすべての対象であるに違いない。

このようにしていわゆる代表単数の用法が生ずる。従って代表単数の使用条件は、それが特定の個物を指示しないということである。そのためには対象の個別性が低いことが前

¹¹cf. М. Фасмер, *Этимологический словарь русского языка*, М. 1964, т. 1, р. 149.

提となる。古代ロシア語において例えば рабъ「奴隸」、плѣнь「捕虜」などのいわゆる社会的身分の低い人物をあらわす語が、意味的には複数でありながら単数形をもって使用されるという顕著な傾向を有しているのも、まさにこの故であったと理解されるのである。

現代ロシア語ではこの用法はかなり一般化して来ているが、やはり個別性の低いものほどこのような使用への傾向が強いように見受けられる。例えば

- (26) В саду служанки, на грядках, Собирали **ягоду** в кустах. (Пушкин)
 (27) Втаскивают гогочущую кричущую на все лады **птицу**. (Серафимович)
 (28) Ведь у меня народ или **вор**, или **мошенник**. (Гоголь)
 (29) Цвет стал осыпаться мохнатыми черными султанчиками, запестрела завязь, начал расти **лист**. (К. Федин)

рыба が主として単数形で用いられるのも、この々事情によるものと察せられる。例えば、

- (30) Завтра придет сто вагонов **рыбы**. (Грамматика АН СССР)

英語の fish, salmon, trout、あるいは sheep など単複同形とされている語は果してこれとは全く無縁な現象なのであろうか。

多少とも個別性が高いものについては、каждый の使用が必要なことを附言しておきたい。

Pluralia

§24 複数は序論において述べたように、互に矛盾する二つの面の統一であると考えられる。単数と比較してその成員個々の個別性の減少と、枠全体の拡大がみられることがこれである。例えば столы というとき、столы という表象に含まれる個々の「机」の個別性は стол の場合の「机」より低いが、стол と столы の表象を全体として比較すれば、столыの方がより大きな心理的圧力を有している。従って外枠の大きさが感じられるのは、複数によって示される対象が単数によって示される対象と同一である時に著しい。これが外枠の大きさを示す複数の条件である。

敬語の вы はこのような場合の典型的な例と考えられる。вы によって示される対象は ты によって指示せられる対象と何等異るところはない。同じ対話者が ты によっても、вы によっても表現され得るのである。この故に вы の有する複数性は専らその枠の大きさに由来する心理的圧力の大きさを表現することに向けられている。敬語として用いられる所以である。革命前には君主が用いた мы (いわゆる royal we) も本質的にはこれと異らない。

このようにして上述の条件の下における外枠の大きさという感覚は、それによって示される対象に主観的な intensity を附与することになると思われるが、これにはさまざまな場合が考えられる。

a) 誇張の複数

§25 これはブイリーナあるいは俗語のように情緒性の強い文体に使用されることが多い。例えば、

(31) Садилa она Вольгу в **погребa** глубокие, записрала **замками** крепкими
...

(32) Хотелось попиловать на **радостях** победы. (Герцен)

b) 持続・反復の複数

§26 前節のような誇張の複数に対して、従来の文法家が持続・反復の複数として分類している用法がある。これもむしろ上述のように intensity の表現の特殊な場合と考えた方がよいと思われる。例えば、

(33) Всю зиму стояли сильные **морозы**, Но вот уже трещат **морозы** И
сереблятся средь полей. (Пушкин)

(34) Вот причина нестерпимых **жаров**, царствующих в Тифлисе. (Пушкин)

(35) Прошли обильные **дожды**.

(36) Повсюду **страсти** роковые, И от **судеб** защиты нет. (Пушкин)

время と времена の場合、времена が一定の歴史的な時期を指すのに対し、время は任意の時を意味するとされるが、Гвоздев は Действие повести происходит в **пушкинское врекя** と Действие повести происходит в **пушкинские времена** とを対照して両者の差を情緒的なニュアンスの相違であるとしている。これもまた intensity の差によるものと考えてとよいであろう。

c) 量的な大きさをあらわす複数

§27

(37) Кругом колыхалась **рожь**.

(38) Кругом колыхались **ржи**.

(39) До горизонта желтел **песок** пустыни.

- (40) До горизонта желтели **пески** пустыни.

これは Гвоздев が対照するために掲げた例である。通常この種の物質名詞が複数形をとる場合は、この物質によって覆われた空間をあらわすと説明されている。しかし上例にみられるように単数であっても「空間」をあらわし得るのであるから、この説明は必ずしも当を得ていない。やはりその差は intensity に基づく量的な感覚に求められるべきであろう。複数のもつ情緒性は次のような例からも明らかである。

- (41) Еще в полях белеет снег, А **воды** уж весной шумят. (Тютчев)

- (42) Люблю ее степей алмазные **снега**. (Фет)

これらの例における **воды** あるいは **снега** は明らかに空間をあらわすものではない。この種の複数が空間をあらわすとすれば、それは上述の機能から派生した副次的な意義に過ぎぬと考えてもよいであろう。

d) 敬語としての複数

§28 вы については既に述べたが、特殊なものとして俗語的に複数の動詞を使用する場合があった。これは特に 19 世紀にみられた用法である。例えば、

- (43) Госпожа какая-то вас **спрашивают-с**. (Тургенев)

- (44) Вот теперь тоже Евлампия Николаевна **вдовеют**, господин Лыняев тоже холостой. (А. Островский)

- (45) Я от графа, ваше благородие. Граф **изволили** сам кланяться и **просили** вас немедленно к себе-с. (Чехов)

§29 上述したように枠の大きさを表現する複数形の使用に対して、複数の表象を構成する成員の個別性を問題にする場合がある。

単数の指示する所与の対象に対して複数の表象を構成する成員としての対象が、個性の何等かの弱化を特徴とすることは、既に述べた通りであるが、複数が存在するということは、逆に単数の指示する対象が十分に高い個別性を有することをも前提としている。この故に複数の存在は一方では単数でしか存在し得ないほど個別性の高いものの個別性を弱めると同時に、他方では極めて低い個別性しかもたないものに対して、その個別性を保証するという役割を果たす。これは $s - p - s'$ の系列の中間項として両者を媒介するものであるところから生ずる、二面的な性格によるものと考えられる。さきに述べた *royal we* に対立するいわゆる *journalistic we* はこの前者の例である。

§30 単数でしか存在し得ぬほどに個別性が高いのは勿論固有名詞、特に人名によって指示される対象である。これは複数によってその個別性の弱化をもたらす。いわゆる普通名詞化である。例えば、

(46) Мы все глядим в **Наполеоны**: Двуногих тварей миллионы Для нас орудие одно. (Пушкин)

(47) Так ты, — говорит, — рассказы пишешь, в **графы Толстые** метишь? (Горький)

前節で触れたいわゆる *journalistic we* も、*я* の個別性が人名に比肩し得るほどに高いと考えられるところから、この項に属すべきものとしてもよいであろうと思われる。

§31 逆に個別性の極めて低いものの個別性を複数によって保証する場合は、特に集合名詞、物質名詞、抽象名詞の場合に顕著に認められるが、これにも若干の種類がある。

(a) 種類・分類をあらわす複数

§32 *дорогие вина*, *высококачественные стали* などのように種類をあらわす場合には、複数をとることが可能である。これに属するものとして例えば、

(48) **Отрады**. Знаю я сладких четыре **отрады**. (Брюсов)

(49) А зимных праздников бляющие **тревоги**. (Пушкин)

(50) **Вдохновений** дерзостный полет. (Тютчев)

これらの例においては、さまざまの「喜び」、さまざまの「不安」、さまざまの「靈感」などの存在が示されており、複数形が存在によって個々の「喜び」「不安」などの個別性が保証されている。

分離を示すとされている次のような例も、これに属するものと考えられる。

(51) Каждый божий день гости у нее, **чай да сахары** ... (Горький)

сласти, *консервы* などの食物、ならびに *белила*, *румяна*, *чернила* などが *pluralia tantum* であるのも、この類に属するためであるとは、考えられないであろうか。

(b) 具象性の獲得

§33 上述の *отрады* などはさまざまな *отрада* が存在することを示しているから、既にある程度の具象性を獲得している。これを更に一歩おし進めると、例えば *красота* に対する *красоты* 「景勝地」、*дружба* に対する *дружбы* 「親しい人」、*высота* に対する *высоты* 「山頂」のように、極めて具体的な対象を示すことができる。

(c) 複雑な行為をあらわす複数

§34 хлопоты, переговоры, испытания など、従来の文法家が複雑な行為をあらわすために複数形が使用されていると述べているのも、結局は複数によって個々の行為の個別性が個別性が保証されるからに外ならないと考えられる。

§35 その他詳細に分類すればきりが無いが、その他のものも、すべて上述の原理によって説明することができるように思われる。例えば прятки 「かくれんぼ」、жмурки 「鬼ごっこ」、шахматы 「チェス」のような遊技、именины 「名の日」、поминки 「追善供養」のように儀式に由来するもの、сутки, сумерки, каникулы のように期間をあらわすものなどが pluralia tantum であるのも、容易に理解できる。

また воды 「河川、沼、湖、大量の水」、земли 「土地、国」、поля 「畑、帽子のつば」のように、複数の存在によって成員の個別性が保証され、それが語彙的な意義の分化をもたらすこともある。стекло 「ガラス」、стекла 「ガラス板」のような場合もこれに属するものであろう。

おわりに

講義ではこれと関連して、数詞、双数のカテゴリー、動詞の呼応についても述べたが、紙幅の都合もあり、また内容的にも一段落したので、これらは別の機会を俟つことにし、ここでは前半のみを発表することにした。お断りしておきたい。